

2021年9月14日に、Ussama Makdisi 著 *Age of Coexistence: The Ecumenical Frame and the Making of the Modern World* 読書会の第一回目が行われた。ここでは、読書会についての私の感想を簡単に述べたい。

今回の第一回読書会では、“Introduction: The Ecumenical Frame”を範囲とし、岡崎弘樹氏が報告を担当した。岡崎氏による全訳が示され、それをもとに参加者が本書の内容に関する意見交換を行なった。

今回の議論の中心となったのは、Makdisi の言う the ecumenical frame のエキュメニカルとはどのような意味か、という点である。参加者からは、「エキュメニカル」というとどうしてもキリスト教の教派の統一を目指すエキュメニズム運動のようなものを思い浮かべてしまい、中東における諸宗派の共存という文脈で使うのがふさわしいのかどうか、という指摘が上がった。その上で、ecumenical frame を日本語にどのように訳すべきか、今後注意して検討する必要があるだろうという意見も出された。

確かに著者自身、なぜ ecumenical という言葉を選択したのか、詳しく説明しているとは言い難い。私も、ecumenical という宗教対話のような、宗教指導者による教義をめぐる対話やすり合わせのようなものをイメージしてしまう。しかし、本書でも著者が明らかにしている通り、中東における宗派対立と呼ばれるものにおいて、教義をめぐる対立や教会などの宗教組織同士の争いという要素はかなり少ない。ゆえに、宗派間の共存のために宗教対話のようなものが果たす役割は限られているだろう。こうした観点から、ecumenical という言葉が、著者が本書において想定している「共存」を的確に表現する言葉なのかどうか、私自身も疑問をもった。

このほか、本書が主にマシュレクの事例を扱っていることから、例えばマグレブなど他の地域にどのくらい筆者の主張があてはまるのか、という点についても参加者からコメントがあった。ある参加者は、マグレブにおいて、リーダーたちが、宗派に関する問題を、植民地における分割統治の問題としてのみ理解してしまうことが（マシュレクと比べて）比較的容易だったのではないかと指摘した。

Makdisi は本書において、例えばイントロダクションでも 19 世紀における世界全体の状況や、アメリカの事例にも言及しており、本書を通してマシュレクだけではなく他地域にも適用できるより普遍的な視点を提供しようとしているのではないかと私は考えている。私の解釈では、本書で明らかとなるのは、マシュレクにおいて、近代化の過程でどのように宗教的差異や宗派的アイデンティティが扱われ、重大な政治・社会的 이슈になったのか、ということである。言い換えれば、オスマン帝国支配下のマシュレクにおいて、帝国の近代化政策、植民地主義、(宗派によらない) 平等という思想、宗教的なものをある領域に封じ込める世俗主義、(宗派を越えた) ネイションの統一を謳うナショナリズムなど様々な近代の要素が交錯することで、宗派が特定の仕方で政治・社会的に重要な意味をもつことになる過程が描かれているのではないだろうか。このことを踏まえれば、植民地主義やナショナリズム、世俗主義などが、他の地域において宗教的な差異 (に関わるアイデンティティ) にどのような結果をもたらしたのか、ということ、Makdisi

の議論を踏まえて検討することができるのではないかと考えながら他地域の専門ではない私は本書を読んでいた。今後も、本書の議論が他地域においてどれほど参考になるのかについて、様々な地域を専門とする参加者の皆様のご意見を伺えればと思う。

読書会の最後に、本書 10 ページの *This interplay between and among dynamic and variegated groupings of secularists and communalists in the Middle East has contributed to the inherently conservative nature of the ecumenical frame and suppressed its more radical implications.* という箇所を受けて、ある参加者から、本書で示されているのは、様々な知識人が示した、共存のための様々な構想であり、その中には結局抑圧され実現することのなかったラディカルな構想もあった、ということではないか、という指摘があったように思う。これは、今後本書を読み進めていくうえで重要な指摘だと感じた。また、Makdisi 自身が認めるとおり、本書で扱われる事例は、地域、ジェンダー、階層などに偏りがある。本書では扱われていない様々な共存の構想があったはずであり、本書を出発点としつつ、本書からは抜け落ちてしまった共存の展望や宗派との向き合い方はどのようなものなのかについても、考えながら今後読み進めていきたいと考えた。